Osaka University Knowledge Archive

Title	吉村勝露生著「人間的な基督」翻刻・註・解説
Author(s)	林田, 雅至
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/85551
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

人間的な基督

吉村勝露生

人物

基督
ユダ
弟子達
祭司の長、殿司(みやもり)外に男女數名

時代

西暦紀元前

第一場

ゲツセマネの園

小廣き草原、草原の涯には常緑樹が稍密に植ゑてゐる。その間に、遠山が、傾きつゝある太陽の光を受けて、輪廓をハッキリ描いてゐる。右の方に、麓に下る小道が一條、曲りなりになつてゐる。

弟子供はキリストと祈つてゐたが、飢と疲の爲に、祈禱の姿のまゝ居眠つてゐる。基督は獨り、弟子達と離れて、左の方で蹈つて痛く悲しみ祀つてゐる。

瞬時(しばらく)にして立上り、弟子の方に歩んで來る。

基督　オイ〳〵！　どうしたのだ！　あれ程、サタンの張つた迷惑に、掛らない樣に、一生懸命神に祈るやうに吩咐けたのに……、氣持良ささうに、今迄の迫害苦痛飢餓等の受難をも、忘れた樣に、安らかなイビキをかいてゐるな。

（云ひつゝ弟子共の寢顏を見る。）

……。俺の奉ずる神はその寢顏だ。無爲の境に忘我の域に彷徨する心の持主だ。起すのも可哀想だ。そのまゝ寢させてやらう。

アゝ。何と靜かな日だらう。あの森の木に訪ふ風の音が聞える樣だ。あれは草叢から出た虫だな。又白い花、黃紅色々な花、サウ〳〵あの花を摘んで花輪にして、母さんに上げた事があつたつけ。虫を捕へて喧嘩させたり、虫の取合で、友達と組打迄した事もあつた。

あの日の友達は今どうしてゐるだらう？　矢張り、ベツレヘムで、彼の野原で遊んでゐるだらうか？　俺の事を思出してゐるだらうか…。生れた土地に抱れて、生きて行く人は幸福だ。羨しいな！　夫に較べて、俺と云ふ者は、生れる時から、惠まれなかつた。社會の人々と伍する樣に許されなかつた。馬鹿な博士共は―狸か狐に騙かされて―東の國から、ワザ〳〵來て、俺を―大工の子を、神の子と云つた。但だ、星が俺の產屋の上に在つたからださうな。お蔭で、イヂプト三界迄、逃げ、夫からと云ふものは、いつも追はれて逃げる樣な生活をしてゐる。木蔭で、夜露を凌いだ事もあつた。草藪の中に、モグリ込んで、野獸を避けた事もあつた。俺の心は絕えず何者かゞ脅してゐる。バリサイ人の獰猛な、血に渴へた、狼の樣な奴の影法師が、俺を取卷いてゐる……。

今日は、總べての桎梏から逃れた時、囚人が輕い、浮々した氣持で、足を踏み出したり、四股を踏んだりする樣な普通の人が味ふ事の出來ない、自由の身を感謝する樣な氣分がする……。段々暮れかゝるな。山々が、身體一パイに光を浴びてゐる。金色の彩雲！　眞赤な太陽！　アゝ、愉快だ！

愉快さうに大胯で往來する。鳥が二三羽羽バタキして過ぐ。此靜けさに對して、夫は脅威的な騷音だつた。

畜生!!

衝動的に石を拾つて投げようとす。が氣がつき、弟子達が目を醒まさないので、ホッとし、力なくゲッタリ、坐りこんで兩手で頭をかゝへる。

情ない！　俺は、俺はさうまで自己の心、意識作用を打潰ぶさねばならないのか。俺は、人間的な慾望を、「神の子」の文字と帳消にした。本然の性を、意識しながら破壞した。こんな—さうだ、俺は變體的とも云ふ—例外的な性を僞造した。此んな虛飾した奴を、俺はイッハリ、世の人々に美しく、純なものとして、見せるために、神の攝理だとか、我父の訓と云つた。俺は若しも、その動機を聞かれたら、無意識だと云ひたい……。

あいつ奴！　バプティスマのヨハネの奴！　俺がこんな、非人間的な生活の緒を開いたのも、阿奴の口車に乘つたからだ。ヨルダン河で、群集心理に動されて、水を浴びた、バプティズマとやらをやつたら、阿奴、惡賢しくも、「私は貴方の靴の紐を解く事も出來ません」と、煽てゝ口上手に、俺にその役目を讓つた。其時俺も馬鹿だつた。宇頂天になつて、神樣見たいな事をやり、自己の凡人たる事、無能なる事も忘れ、自己の眞實な心が、蟲ぶんで、竟には他人と反對の事を云ひ、云ひ負かすためには、心にも無い事を云ひ、變體心理の人間になつて、如此く、喪家の狗の樣に、歩いてしまふとは知らなかつた。そして俺の心は世に反抗した。彼等が迫害すれば、する程、俺の心はヒネクレた。すべて、彼等の行動の裏に出た。俺さへ知らぬ、神をも無條件に肯定した。學者、祭司の長共が躍氣になる程、心に快哉をさけんだ。人をへこましたりするのが好きになつた。排他的は病的になつた。

財產家が成佛を賴んで來た。彼奴は、道德的に、人格的に優越してゐた。そこで俺は彼奴も、普通の人間、無產者に下げ優越感を味ふため、汝の有する財を捨てよと、云つたら蒼白うなつて逃げた。俺は、「富者の天國に入るは

駱駝の針の穴をヌケルより尙難し」と、云うて溜飲を下げた。又かう云ふ事もあつたつけ。町で姦通した女を、人々が石で打殺さうとした。俺の心は擡頭した。「お前等、罪無き者、先ず彼を打つべし」と、やつたらコソ〳〵逃げやがつた。俺は見てはいけない者を見る樣に、弱々しいが、アダッボイ その女を見た。俺の目は淫邪の光で輝いてゐた筈。俺の心は狂つた。人並に女を戀うた。が女は俺を人間以上に見た。木石の金佛位に見た。すべて善の方面を見、神と云ふヴェイルで包んで、人間と云ふ者を見なかつた。彼女は戀情を捧げる代りに尊敬の情を捧げた。その時、俺は何となく悲しみの奈落に突落された氣がした。女と云うと（目は活々として來る、何物かを戀ふ樣に）あのマグダレナのマリヤが戀しい。夏のカン〳〵と照る日、喉が渴いて、井戸に水を飲みに行くと、女は水を掬つてゐた。スレタ所もあつたが、處女のオボコさもあつた。弟子一人も居ない。誰一人として俺を、救世主と云はれる俺を知つてゐる者は居なかつた。俺はビク〳〵しながら、水をお呉と云つた。女は甕に手をかけた、俺は無中で眞の、俺の姿で手でくんで呉れと云つた。その時、もう相手の顏はノッペラボーに見え、飲んだかどうしたのか、わからない程だつた。其時の狼狽さ—その時の氣持！　恐らくは世人の戀と云う者だらう——。彼女は娼婦だと云つた。が俺には初戀の人だ。潔白とか、汚穢は問題ではない。其時初めて說敎—眞の說敎をした。兄が妹を諭すやうに。彼女の目が俺を見つめた時、彼女は神々しかつた。邪念か一掃されるやうだつた。だがあくまで俺は惡れなかつた。ユダの奴が來て俺の心を讀んでしまつた。阿奴は恐しい奴だ。必ず俺を裏切る。俺を賣つて、マリヤを物にする筈。阿奴もマリヤに戀をしてゐるから……。負けてたまるか！　俺のマリヤだ！　糞!!!　ユダの奴！　どうにかしてやるぞ！

山道からユダ先頭に立ち祭司殿司共と話しながら來る。彼等はエモノを持つてゐる。基督、ユダの聲を聞き、ハネカヘサレる樣に飛上り身を地にスクマせ、ひそかに聞く。

何!! 色と慾の二道! マリヤと銀子! 畜生! とう〳〵俺を打負したな……。なあに、腕づくなら五分々々だ。あのマリヤ、可愛いマリヤを誰に……。ヨシ! 死ぬまでだ。

沈默稍冷靜になる。

が、俺はこんな事で、彼女を得ても……。俺の今迄の努力は水泡なのだ。俺は世人に何と敎へた。「己の敵を愛せよ」と云うたではないか。女一人! 私の情だ。俺は名が惜しい。救世主の名が捨てたくない。俺はヨリ大なる愛の世界に生きねばならぬ。些細な感情を捨てねばならぬ。宇宙の人を抱擁する博愛の創造主たらねばならぬ。博愛だ!

ユダ、イエスに來り、接吻せんとす。人聲に、弟子共醒め基督を防衛せんとす。

基督　ユダ! お前は接吻を合圖に俺を、神の子である俺を賣らうとするのか?

ユダ……。(たぢろき、キリストの顏を見て俯く)

弟子達　主よ! 刀を拔いて、サタンを追ひ放つて宜しうございますか?

弟子の一人、躍出し祭司の長の僕を傷く。

基督　待て! 宥してやれ。(祭司殿守の前に進む。)

お前等は刀や棒を持つて、丁度强盜に向ふかの樣に來てゐる。宛然、俺が超人的な膂力を有してゐるかの樣に……。がお前等は、殿堂に居る時、指一本すら、さそうともしなかつたのにね……。

四方は段々暗くなり、トップリ暮れる。

スツカリ暮れたね……。眞暗だ。誰やらサツパリわからん。善も惡も、明も暗も歸する所は此暗の色だ。人間も每日此暗のトバリに向つてゐるのだ。

俺も今度は、人間並に、此暗の色に包まれて、二度と明るい色は見られん樣な氣がする。到々、人間的な、死に對する

恐怖が勃つたな。アハヽヽヽ。さあ行かう。

危い！　皆氣をつけろ。道が悪いからね……。

キリスト下る。祭司、弟子達、無言で後に從ふ。

——幕——

第二場

コルゴダの刑場

中央に、丘陵が遠く小さく蹞つてゐる。小廣き草原、所々地膚が露はれて、濕つてゐる。右手に、殿に通ずる道あり。道に沿うて、多くの女共、三々五々と、或は立ち、或は坐つて、話をしてゐる。その側に、男數人、輪になつて、話をしてゐる。時、正午近い。

女一　ほんとにさ！　大それた事を仕出かしたもんだよ。罰當り奴等が。何んぼ何だつてあんなバラバ見たいな大悪人——一寸切、五分切して食つても、厭きん程にくたらしい狼の野郎——を無罪にしてさ、生佛樣のエス樣を十字架につけるなんて……。畜生阿奴等皆、くたばつてしまつた方が良いんだよ。男の癖に、ゐらさうに口鬚もつけてさ、夫位の事がわからん事があるもんかね。一丁字も知らん、妾なんかでも是非善悪を見分けるのは朝飯前だよ。今に見るがいゝ。神罰を受けるから……。

女二　さうだよ、お前さん。犬畜生におとる奴等だ。どれ程エス樣にお惠みを受けたかわかりやしないんだよ。夫なのに、今度の始末は……。實際、犬も三日飼へば恩を忘れんと云うのに。没義道の野郎共は地獄に落つこちたが良いよ。

女三　可哀想に、あの神の子樣も、もう今日限りで、此世ではお目にかゝれん。なあ、皆の衆や。エス樣は、何時も、さうおつしやつた。汝の敵を愛せよ。皆仲良く暮らせ。四海兄弟とね。又どんな貧しい人でも、其日其日に追はれる私達でも、悔改めて、悪い事をしなければ、永遠の命を受ける——。チト、難しいかも知れんが、要するに、天

國と云ふ、神樣のお國でいつまでも生きる事が出來るさうだよ。人間は心が大切だよ……。

エス樣は優しいお方だよ。私見たいな、ヨボ〳〵した者にも、もつたい事だよ、お自分で祀つて下さるし、優しい言葉を下さる。私エス樣の事を思うと、有難いやら……尊いやら……嬉し泣をしますよ。（シャクリあげる）

女一、二、引入られて泣く。女一、基督を見る。

女一　あれ〳〵。皆さん。エス樣がお出になつた。さあ、お迎へしませう。

（シモン、十字架をかつぐ。基督、平素の樣に來る。路傍に泣き悲しむ女共を見て、奇異を感ず。

基督　もし〳〵。どうなすつた？　悲しい事や、心に心配ある人、死を恐れる人はお出なさい。亢慣してはいけません。靜かに、貴女達自身や、お家族のために祈りなさい。祈にまさる何物もありません。天の父は必ずお聽きになるでせう。（云ひつゝ歩いて行く）

女共は、優しい言葉に一層、シャクリ上げて泣く。男達、エスの後姿を見る。

男一　どうだい！　野郎のニヤ〳〵した樣子と云ひ、糞度胸の良い事は。十字架はてんで眼中に置いてゐないぢやないか。死刑なんて糞食へで問題にしてやいないんだ。

男二　知らぬが佛とは奴さんの事だ。一時間もしたら、三尺高い所でお陀佛とくるんだから面白えや。夫にさ、悲しい者、心配ある者までは良いさ、死を恐れるとはどうだい！虫の知らせかな。死を恐れない奴があるもんかい。

男三　さうだ！〳〵。俺なんか、お役人に一寸にらまれても、ゾットする。一度でも、戯談で死刑にしてやると、云はれて見ねえ。たまげて死ぬかも知れねえ。夫に阿奴！　殿守樣方の宣告なんか、冗とも思はん。豪氣ぢや無えか。一體阿奴は、馬鹿か、白痴かも知れねえよ。

男一　だが阿奴は薄氣味悪い野郎だよ。惡魔の親玉かも知れない。氣狂をなほしたり、中風を治したり……。

男三　夫にパンの四つで三千人も食べさせて、殘つたと云ふぢやねぇか。
男二　あれや、二人位食つて、外の野郎共は見てゐたとはちがうかい。
男一　何にしても、變な奴さ。

或地點に到る。殿守達は互に目配せする。一同の顏は決意の情に漲り、殺氣は濃くなる。急に飛びつく。十數分の爭の後、エス二三間離れて立つ。

基督　何をなさるんです！　初めは戯談と思つてゐたのに……。ご覽ん！此衣の裳や、袖はボロ／＼ではありませんか。見つとも無いぢやありませんか。（靜かに衣を正しくし、平靜な態度をさらうと努める。）どうしたんです。だしぬけに――喉を締めたり、腕をねぢたり、呼吸も出來ん位、人を苦しめて……。宮に仕へる人にも似つかぬ、追剝同樣な事を白晝やるなんて。以後お謹しみなさい。が、過は誰でもあるのです。皆さんの……

（急に何物かゞ頭にヒラメく。相手を見て、ハットし、恐怖の狀顏を襲ふ。）

恐しい眼だ！　瞋恚の焰が燃えてゐる！　憎惡の迸つた眼光！　ヂリ／＼と胸に鋸をあてられる樣だ。　アッ！

一、二、三！有る、有るォッ！　俺の周圍を取卷いたな……。

沈默

俺をどうしやうと云うんだい。俺を知らんか？　神の子を知らんか？　奇蹟を行つた俺を見違つたのか？　力を見たいか？　神の力を疑うのか？　歸れ／＼！　あつちに行け！

殿守尙ヂリ／＼肉薄す。

ねぇ諸君！戯談も此位で止して呉れよ。ほんとに。俺見たいな臆病な者には、殘酷すぎる脅しだよ。その樣な目付をして下れるな。賴む！　呼吸も出來ん位壓せられる樣だよ。アッ！　お前等の目は瞋恚や、憎惡の焰は消えた。

その代りおう、おう恐しい！　殺……殺氣が漲つてゐる。やる氣か？　俺を！　俺を殺す氣なのか？　貴樣達はサタンの手足となつたな。お前達は自己を失つてゐる。認識力が麻痺してゐる。俺は！　俺はもう見る事は出來ん！恐しい！　駄目だ！　駄目だ！

バツタリ倒れる。殿守達得たりとおどりかゝり、衣をうばひ、棘の冠をかぶせ、紫の袍を着せる。しばらくして、エス、氣がつく。

基督　……矢張り……。（靜かに起きる）痛！　棘の冠か！ァハヽヽヽ。（淋しく笑ふ）紫の袍は、チヨツト派手だな、が新しい衣はさつぱりして、氣持が良いもんだ。何だか他人になつた樣な何かしらん懷つかしい氣持がする。子供が正月着の衣を抱いて寢る時の氣持が又味はられる。愛着が感ぜらる。

フト十字架を立てる音に氣がつく。

あの音だな！　俺の死の行進曲だな。段々死の三番叟が始るらしい。だが、俺自身が死ぬとは思はれぬ。第三者の位置に立つてゐる樣な氣がしてならぬ。成可くならさうありたいもんだ。死にたくはない。何故と云う事はない。死にたくないだらう。一體、死とは何だ。今迄死と云う事は、頭に爪ほども浮ばなかつた。又その必要もなかつた。が皮肉だ。死を救ふてやる人が死ぬ。そして救ふべき人を持たぬ。人々は俺を求めた。俺は誰を求めやうか死ぬ—死、夫は生きる、生と同じではないか。又人生の目的だ。人は生れる、夫が死の初段階、スタートでは無いか？死ぬために生れる。俺が死ぬ。不思議もない。當然すぎる當然だ。が、ミミズは首が切れても身體が二等分、ズタ〳〵になつても生きてゐる。ィヽャ、生き樣と努めてゐる。生に嚙り、どうかして、生存を續かそうと一生懸命になつてゐる。又人間の斷末魔の、口惜しさうに、しがみついても生きたいやうに食ひしばつた口、カツト見開いたまゝの目、何物かを取らう、攫ふと虛空を——取つても、攫んでも無駄な空間を根氣よく、屈古垂れず、攫ふとあせつ

たらしい手！苦痛の最大限を盡した顏の筋肉のツリ具合……。

沈默

手の甲がザラ〳〵した。毛か立つて來た。冷水を浴びた樣だ。——逃げたい！　どうかして奴等を殺してでも逃げたい。イヽヤ、生きて生きぬくんだ。殺されるなんて……。

隙を伺ひ逃げやうとす。が捕へられて刑場に引ぱられる。

基督　殘念だ！　殺す氣か！　俺にあの樣な苦痛をなめさせるのか！　俺は生きたい。誰か……誰か、俺を助ける奴は居ないのか……。

弱虫！　恩知らず奴！　卑怯者！　苦しい！　生きたい……。

やがて刑場に姿は消える。女共、十字をきて默祈す。

男一　アハヽヽヽ。良いざまだ！　普通人より一層人間味があるぢやないか。

男二　もがいてゐるよ。エヘヽヽヽ。ユダヤの王樣とさ。

男一　ユダヤの王樣かね、榮光彼にあれ。アハヽヽヽ。

男三　イヒヽヽヽ。ユダヤの王樣！　萬歲！　イヒヽヽヽ。

基督のウメク聲、物狂しき笑聲、人々のスヽリ泣の中に

幕。